

令和3年度 11月全校朝礼(高校)

今日こうして1学年だけですが、集まることができ、とても嬉しく思います。新型コロナウイルス感染拡大が現在のところ、収まりつつあり栃木県の感染警戒度も1となっています。今後もこの傾向が続き、早く日常が戻ってくることを誰しもが願っていることでしょう。そのためにも皆さんはこれからも油断せず、検温、マスク着用、手指消毒など、引き続き一人ひとりができる感染予防に努めましょう。

ところでこの2年間近く、皆さんも様々な制限の中での生活で、多くのものが失われても、よく頑張ってきました。決してマイナスばかりではなく、改めて学校生活を含め日常生活の大切さに気づいたり、安全、健康、そして命に関して考える機会を得たのではないのでしょうか。このように私たちは思ってもいなかったような困難に出くわし、それに打ち勝つために強い心を持ち、それに耐えながら歩んで行かねばならない時があります。そこで今日は、このような状況において様々な悩み、苦しみを抱えているかもしれない人たちに、私の一人の教え子の話をします。

名前は荒美有紀さん。彼女は、國學院栃木の中学校に入学、吹奏楽部でフルートを吹き、友人も多く明るく楽しい学校生活を送っていました。それが、確か高校2年の終わり頃でした。音が聞こえづらいつらいというのです。それに伴って身体の不調を訴えるようになり、遅刻・欠席が多くなりました。様々な病院で検査をしますが、原因不明。結局、東京の大学病院で検査した結果、病名は「神経線維腫症Ⅱ型」、脊椎の神経に腫瘍ができるという病気と判明しました。国の難病指定になっている病気であり、治療法は見つかっていません。そうして3年生になって地元の病院で入退院を繰り返し、時々東京の病院に通うという日々を送っていました。無理はできないのですが、本人がどうしても勉強で遅れたくないと言うため、同級生たちが彼女自身のために作った授業ノートを作成、ある程度まとまると私はそれを持って病院に行きました。そうした彼女の学習への熱意と同級生たちの助けもあって高校を無事卒業します。その後、東京の病院で本格的に治療を受けるため、お母さんと東京へ転居。その東京で彼女はフランス語を勉強したいという気持ちを持ち続けていました。それで調子が良い時はできる限り予備校にも行き、こつこつと受験勉強に励んでいたのです。その努力が実り、1年後に明治学院大学の文学部フランス文学科に合格。大喜びで報告に来てくれたことを今もよく覚えています。

ところが、残酷にも病気は容赦なく進行し、彼女が大学2年生の時、視力を失い、さらに大学4年生の時に聴力を失います。身体も不自由を感じるようになり、車いすでの移動が主になります。著書『手のひらから広がる未来 ヘレン・ケラーになった女子大生』の中に、光と音を失った悲しみ、孤独、絶望といった彼女の心の叫びが綴られていました。「なぜ私が」と運命を呪ったこともありましたが、しかし、過酷な運命を背負った彼女を救ったのは、彼女のことを心から思ってくれる人、助けてくれる人、家族であり、友人であり、楽しかった学校生活の思い出だったのです。

さらに福島智さんという人を知ったことも、彼女が一步踏み出せた大きな要因の一つでした。実は福島さんは、3歳で右目、9歳で左目を失明。18歳の時に突発性難聴で聴力も失います。しかし、努力に努力を重ねて東京都立大学に入学、現在は東京大学の教授をされていて、バリアフリー教育、障害者福祉などを専門に研究されています。荒さんが福島さんの生き方に大きな刺激を受けたこと以外に、もう一つ影響を受けたことがあります。それは指字というものです。福島さん

は記憶を頼りに大学の講義なども声を発していますが、お母様の考案した指点字というものも使い、会話とコミュニケーションを図ります。指点字とは、点字1字を表す6つの点を、両手の人差し指、中指、薬指の計6本に対応させたものであり、キーボードを叩くように、相手の指に触れることで、文字や言葉を伝えるものなのです。後に荒さんはこの指点字を広めることに尽力します。著書のタイトル「手のひらから広がる未来」というのは、ここから来ています。

その後、「失ったものを取り戻したい」と点字を猛勉強し、1年間大学を休学した後、復学、2014年に卒業しました。国のモデル事業の訓練生第一号にも選ばれ、親元から離れて生活訓練をしながら一人暮らしも体験します。そして、ブログでその時々自分の心境を発信、新聞社の取材に応じたり、NHKなどのテレビに出演、さらには講演活動(2016年10月には栃木市の藤岡文化会館で講演がありました)を行うことによって自分自身のことを世の中に発信していきます。

しかし、すべて順調に事が運ばれた訳ではありません。マスコミが「障害者」をステレオタイプの考えで取材してきます。荒さんは、記者に「私は誰かを感動させるために生きているんじゃない」と言ったこともありました。また、周囲の人々に対しての思いとして、「自分の感情が暴れ回ったり、周りが自分のことをどう考えているかがとても気になったりすることがあります。障害を持ってみると、可哀想だと思われるのがとても嫌で、他人の優しさもその裏側にある気持ちを考えてしまって、素直に甘えられないのです」と語っています。身体が不自由なことの苦しみだけではなく、それ以上に心の苦しみがあったのです。

では、それでも彼女を突き動かした原動力とは何なのでしょう。ある番組でこうしたやり取りがありました。司会者が「人の前に立つと良いことも悪いことも含め、いろいろな意見とか思いを受け取ることがあるけれど、それでも続けるのはどうしてですか」と訊ねました。彼女の答えです。「支援につながらなくて、苦しんでいる盲ろう者の人たちがいて、誰かが伝えないとそういう人には受けられる支援があるのだということを知ってもらえないのです。それが私の仕事だと思っているので、できることはやりたいと思っています。支援があればどのようなことでもできる可能性があるのです。それを伝えていきたいです」。つまり、彼女を突き動かしているものは、「誰かのためになりたい」と気持ちなのです。「人のために」、それが彼女の生きる支えであり、生きる意味なのです。

彼女は、あるテレビ番組でこうも言っています。「盲ろうの人、障害を持った人だけじゃなくて、いろいろな苦しみを背負っている方がいると思います。この番組を見て、そのような苦しみがある中でも未来は変えていけるんだ、そういう気持ちになってくれたらいいなと思います」。

そして、東京盲ろう者友の会理事、全国盲ろう者協会の発行する雑誌の編集委員など盲ろう者の団体の活動にも参加、国際会議にも出席するなど精力的に活動を続けていきました。そのような荒さんでしたが、2年前の2019年、3月、人生の幕を閉じました。享年30歳でした。自己の運命にも負けることなく、「他のために」という強い思いを持ち、懸命に生きた人生でした。

最後にもう一つ荒さんの言葉を紹介します。彼女にとって一日一日がかけがえのない時間でした。生きていること自体が感謝であり、喜びであったのです。それだからこそ懸命に日々を生きる姿勢を表した言葉です。「明日死ぬと思って生き、永遠に生きると思って学ぶ」。